
幼なじみは悪魔くん

擾已

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼なじみは悪魔くん

【Zマーク】

Z4300E

【作者名】

擾已

【あらすじ】

退屈な高校生活を送る杉崎叶多。そんな彼の元に自称幼なじみと言つ男が現れる。だが彼は人間ではなく悪魔だったのだ。

第1話『始まつは落とした本』（前書き）

警告を読んだ上でご承の方のみどうぞ。

第1話『始まりは落とした本』

梅雨の湿つた空気が漂つそんな季節。

生徒の殆どが日常に飽きを感じ、ハプニングならぬ物を切望していた。

しかし大抵何も起きずにダラダラと時間が立つのを待つだけが多く、そして今回もそうなのだろうと思つていた。

「うるせぇーぞお前ら。さっさと席につけ」

朝のS.H.R。体育担当兼俺たちの担任の山崎が教壇で声を張り上げている。

俺はとっくに席について読書中だったが他の奴らは山崎の言葉を聞こえてないのか相変わらず馬鹿笑いしていた

「静かにせんか！今日は転入生を紹介する」

怒りを含んだたつた一言で静かに席につく生徒達それに安心したように山崎は教室の扉を開けた。

つーか、転入生って一言で静かになるなんてどんだけ現金なんだ毎日に刺激が欲しいとか言つてる割りには毎日ケラケラ笑つてゐやないか

なにが不満なんだか

文句タラタラ窓を見ていると女の嫌に甲高い声に不覚にも驚き本を落とした。拾おうと立ち上ると目の前に差し出された本

「どうぞ」

「ありがとうございます」

見上げた先には日本人らしい色素を持つた綺麗な男気が付けばクラス全員がこの男に釘付けになつてゐる

「久しぶりだねカナタ。会いたかつた」

「えつ？ちょーーつ！？」

転入生が来て5分とちょっと
俺はクラスメイト全員、さらには教師の前で熱い抱擁とキスをされ
てしまいました。

第2話『大事な名前』

「力ナタ、ランチタイムだぞ！食堂か？弁当か？俺は力ナタの愛妻弁当が食べたいな」

クラスメイトに騒がれてるにも関わらずそれらを気持ち良い程に無視して俺に話し掛ける隣の席の変態。たまたま隣が空席だった

なんて事はない。

こいつが来るまでは地味な優等生タイプの男が座っていたはずだ。ただ、俺が色々とショックで固まってる間にかわってやがったんだ

「つるさい。ってかあんた誰。気やすく話し掛けんな」

鞄から弁当を取り出し席を立つ。

変態の周りに集まっていた奴らが非難の目を向けてきたがどうでもいい。

変態だつてふざけてるだけなんだ。軽く流さないでどうする。

ふざけてキスとかいつそ埋めてやりたいがなつ！

まあ、とにかく俺が合わせてやる義理はない。

「そんな子ほつといてあつちで私たちと一緒に食べよお？」
「いや、俺たちとくおーぜ」

下心丸見えの奴らが我先にとアプローチしている姿はくだらないと思いつつ、滑稽で見ていて楽しい

「んーしょうがないか！」

スッと立ち上がった変態は一回軽く指を鳴らした。

そして軽快な音がしたと同時に視界は光で白一色に染まった。

眩しさにきつく目を瞑ると空気が震えたような感覚が身体をめぐり、次の瞬間には騒ついていた教室、いや、学校中が静けさに覆わっていた。

信じられない事はまだ続く。

瞼の下からでも分かる光が弱まったのを確認して目を開けると、まるで時間が止まつたようにクラスの奴ら全員が動きを止めて銅像のように身動き一つしないのだ。

「人間ってのはなんでこんな群れたがるんだ？おかげで一人つきりになれやしない」

突然の怪異をものともせず嫌悪の目で周りを見渡す男。

変態がいた席に座っているからには変態野郎なのだろうが、まったく風貌が違う。

ダークグレーの長めの髪

燃えるような、赤い目

白く細い指の先端にある黒く塗られた長くも形よい爪

そして、背中からワイシャツを破つて存在を見せつけている黒い翼

普通なら気味悪いものでしかないそれらは男の妖艶さを引き立てるものでしかなかった。

そしてこの怪奇現象の元凶はこの場に相応しくないこの男が起こしたと語つている。

「おまえ、なに・・」

擦れた、声と言えない声が喉から漏れる。

俺は

俺は「コイツを知つて、いる

彼の名前は . . .

「れ、な」

たつた一言

たつた二文字

ひどく懐かしい名前

混乱のままに目を向けると男は椅子から立ち上がり、距離を一気に縮めてきた。

お互いの吐息がかかる程近くに

「そうだよ。俺はレナ・グレショル。君の幼なじみ。そして君のパートナー」

間近で見た男の目は高級な宝石のよつて輝いて瞳の奥には強い焰が灯っていた。

そして俺はその虜になってしまった . . .

第3話『約束』

レナに言われるがまま屋上に連れられて来た俺は、なぜか床に押し倒されている

この男が幼なじみの、レナ、だと知った今では、風貌に関する恐怖は不思議と無くなり、懐かしさと愛しさで心がいっぱいになつていてを感じていた

「レナ？」

「長い間一人にしてごめんな」

「それは、約束のこと？」

言えば俺の髪を梳いていた手は止まり、眉を八の字にしたレナは頷いた

昔、家が隣同士だった俺とレナがした約束は、幼いながらに抱えていた不安拭い去ろうとした物だった

ずっと一緒にいよう

しかしそれも所詮必死に繋ぎ止めた物でしかなく、約束なんて形だけの物だと思い知ったのはレナが引っ越して行つた日の事だ

あの日俺は絶望を知つたけど、レナを恨んだり検討違いの怒りを誰かに抱く事はなかった

傍にいてほしいと言つたレナとの約束を守れなかつたのは無力な自分自身だったのだから

「待たせて、約束守れなくてごめん。でもこれからは一緒にいる。
何があつても俺の全てをかけて守り通す！」

「うん。傍について。俺もレナと一緒にいたい。俺、全然力ないけど
レナを守りたい」

そこに教室にいた時の異質なオーラを纏つたレナ・グレシェルは居らず、幼なじみのレナが戻ってきた事に嬉しくなった俺はレナの首に腕を回した

それにより鼻先がくっ付きそうなほど密着した俺達はどうともなく触れるだけのキスをした

離れていた分を取り戻すかのように

何度も何度も

第4話『言葉は大事』

「実はさ、カナタに言つてないことがあるんだ」

十分にお互いの存在を確かめあつた後、レナが氣まずそうに切り出した

目を四方に泳がせ、顔だつて強ばつてるくせに俺の腹の前で組まれた腕を外そうとはしない

そんなとこが可愛くて仕方ない

・・・そんな事言つたら怒るかもしれないけど

「それつてさつき言つてたパートナーについて？もしかして俺の何かを、例を出せば純潔を捧げなきやいけないとか？」

「さすが俺のカナタ！そこまで知つているのか」

昔本で読んだ内容を言つてみれば正解！だなんて、ベタすぎる内容に一気に力が抜ける

「本当は乙女の純潔なんだけどな！俺はカナタが好きだからいーんだ」

「それよつさ、パートナーってなん訳？つて耳舐めるなあつ！」

嬉々として好き好きアピール（変態行為含）をしていたレナは

「パートナーってのは人間で言つ伴侶のこと。だけど俺達はもう伴侶みたいなものだしそこは問題ない！人間との相違点といえばパートナーの間に人間の様な、別れ、の形式はない。つて事ぐらいか。寿命ないしな！」

さらりとどんなでもない事を言つてのけた
まだ好きとか言われてないのに…！

「レナ。自信満々なとこ悪いんだけど、俺はお前に好きとすら言わ
れてないが？しかも俺の気持ちは無視か」

振り向いて言うと間近にある綺麗な顔が真っ青になつていく
それでも綺麗なままなのだから端正な顔の作りの奴は狡いと思つ
両親に土下座する勢いで礼を述べるべきだ

「ごめん！昔に〇〇く貰つてたからその勢いで・・・」
「確かに昔はそう言つたけど子供の心は変わりやすいからなあ～」
「で、でもキスだつて！」
「何言つてんの？キスはこの国じや挨拶だよ？」

ガクッと文字通り膝を折り落ち込むレナ

少しからかつただけなのにな

俺はレナからあの言葉が聞きたいだけなのにな

「れーな？俺に言つことあるだろ？」

顔を覗き込んで笑顔を見せてやればすぐに元気を取り戻す
昔から変わらない、大好きな彼

「カナタ、好きだ！ずっと、大好きだ」
「俺もレナが大好き」

こうして俺は悪魔の嫁になりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4300e/>

幼なじみは悪魔くん

2010年11月11日08時34分発行